



Title	在日韓国・朝鮮人の肝がん・肝硬変の疫学
Author(s)	宋, 桂子
Citation	大阪大学, 1981, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/33144
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 大阪大学の博士論文について をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍)	宋	桂	子
学位の種類	医	学	博 士
学位記番号	第	5365	号
学位授与の日付	昭和	56年	6月12日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当		
学位論文題目	在日韓国・朝鮮人の肝がん・肝硬変の疫学		
論文審査委員	(主査) 教 授	朝倉新太郎	
	(副査) 教 授	垂井清一郎	教 授 後藤 稲

論文内容の要旨

〔目的〕

次の3点を研究の主目的とした。

1. 在日韓国・朝鮮人には、日本人に比し肝がん・肝硬変が多いとの臨床的印象がある。これを死亡統計によって確かめる。
2. 在日韓国・朝鮮人を対象として、健常人から慢性肝障害、肝硬変・肝がんに至る一連の肝疾患の経過において、HBウィルス及び飲酒との関連を明らかにし、日本人の場合の成績と比較する。
3. 在日韓国・朝鮮人の肝がん・肝硬変死亡率は、一世、二世以後の世代とも、日本人にくらべて高率かどうか、HBウィルスの保有率及び飲酒歴は異なるかどうかを明らかにする。

〔方法ならびに成績〕

1. 肝がん・肝硬変の死亡率

大阪府がん登録資料(1968~77年)及び死亡統計資料(1970~76年)により、肝がん及び肝硬変の死亡率を国籍別・年令階級別に求めた。

- (1) 在日韓国・朝鮮人の肝がん・肝硬変の年令訂正死亡率は、日本人のそれらの2~3倍となった。
- (2) 在日韓国・朝鮮人は50才以上を一世、39才以下を二世以後の世代、40才代は両世代の混合と見なしうることを予め確認したうえ、これら各年令層ごとに日本人の死亡率と比較した。どの年令層においても、韓国・朝鮮人の肝がん・肝硬変の死亡率は高かった。

2. 健常者におけるHBs抗原陽性率

- (1) 1977~78年、大阪市内K病院の内科外来患者(韓国・朝鮮人)の全員に対し、肝機能検査、血

清HBs抗原検査（RPHA法）を行なった。肝機能検査で異常を認めなかつた男470人、女448人でのHBs抗原陽性率は、各々10.0、5.5%であった。年令階級別（男女計）にみると、20～39才層では10.8%，40才代では6.8%，50才代では6.7%であった。

- (2) 大阪府赤十字血液センターの献血者カードファイル（1977年～1979年、約50万枚）の中から、韓国・朝鮮名で、GOT、GPTとともに正常の者851人（男693人、女158人）を選び出し、血清HBs抗原陽性率を調べた（検出法はE.S法）。陽性率は男7.6%，女3.2%であった。

日本人献血者での性・年令階級別陽性率を標準とし、韓国・朝鮮人献血者での期待陽性者数を求め、実陽性者数と比較した。実測値は期待値の男で3.5倍、女で1.9倍となった。

3. 在日韓国・朝鮮人の飲酒量

大阪市生野区内2地区に居住する韓国・朝鮮人390世帯を訪問し、20才以上の男、343人について最近の飲酒量ならびに、30才当時の飲酒量について尋ね、うち225人から回答を得た。

- (1) 現在、毎日3～4合飲酒する者の割合は全体の12.5%であった。これを年令階級別にみると、ほとんど差がなかった。また、本調査での飲酒量は、日本人の飲酒量（文部省科学研究費総合研究「アルコール飲量の社会医学的研究」による）とほとんど差がなかった。
- (2) 一世（50才代以上の者）について、現在の飲酒量と30才当時の飲酒量について比較すると、50才代の者では差がなかったが、60才以上の者では、現在よりも、30才当時大酒家のものが多かった。

4. 肝硬変、慢性肝障害に関する症例対照調査

大阪市生野区のK病院へ1977年1月から1979年8月までの間に入院した肝硬変患者の全員（60人）と、慢性肝障害患者の全員（45人）とを症例とし、同時期に同病院に入院した他疾患患者で肝機能に異常を認められなかつたもののうち、症例と性・年令をそろえたものを対照とした。これら両群について、血清HBs抗原の有無と飲酒量とを調査した。

- (1) 症例の平均年令は、肝硬変の男で55.5才、女で58.4才、慢性肝障害の男で47.6才、女で50.9才となり、男女ともに、後者が7～8才若くなった。
- (2) 血清HBs抗原陽性率は、男の肝硬変・慢性肝障害では各27.7%，33.3%であり、対照のそれ（4.3%，8.3%）にくらべ、有意に高かった。女での陽性率は、肝硬変で38.5%，慢性肝障害で22.2%であり、対照のそれ（11.5%，6.5%）より高かったが、対象者が少ないため、有意ではなかった。

HBs抗原陰性者の肝硬変及び慢性肝障害の罹患に関するリスクを1.0とした場合、HBs抗原陽性者の相対危険（relative risk）は、男では7.1、4.9となり、女では4.3、3.9となった。又、肝硬変及び慢性肝障害の罹患におけるHBs抗原の帰属危険は、男で20.6%，24.5%となり、女で27.5%，13.9%となった。

- (3) 大量飲酒者（毎日3～4合以上飲むもの）の頻度は、男の肝硬変では66.7%，慢性肝障害では50.0%となり、それぞれ対照の31.1、33.3%にくらべ有意に高かった。

非大量飲酒者での肝硬変及び慢性肝障害発生のリスクを1.0としたとき、大量飲酒者での相対

危険は4.3, 2.0となった。又、大量飲酒の帰属危険は肝硬変で50.6%, 慢性肝障害で24.2%となつた。

(4) 本症例における、HBs抗原の飲酒についての相対危険と帰属危険とを日本人の症例におけるそれら（大阪肝炎・肝硬変研究会による報告）とを比較した。HBs抗原、飲酒ともに、その相対危険は、両シリーズの間で著差はなかったが、帰属危険は、いづれの要因の場合も、在日韓国・朝鮮人において大きくなつた。

[総括]

大阪に居住する韓国・朝鮮人の肝がん・肝硬変の死亡率は、一世、二世以後の世代のいずれにおいても、日本人のそれより2～3倍高いことを認めた。また健常者における血清HBs抗原陽性率は、日本人のそれの2～3倍高かった。さらに、肝硬変・慢性肝障害について症例・対照研究を行なつたところ、HBs抗原、大量飲酒が両疾患の発生に強く関連していること、両要因の相対危険は、日本人の場合のそれらに近似していたが、帰属危険は日本人のそれより高いことが明らかになつた。

論文の審査結果の要旨

在日韓国・朝鮮人には、日本人に比し、肝疾患が多いとの臨床的印象があった。しかし、韓国・及び北朝鮮においても、これに関する報告はみられず、又、在日韓国・朝鮮人については資料の収集などの点で困難な問題が多く、疫学的研究はほとんど行なわれなかつた。

本研究では、上述の困難を克服し、在日韓国・朝鮮人では、日本人に比し肝がん・肝硬変の死亡率が2～3倍高いこと、又、健康人での血清HBs抗原陽性率も2～3倍高いことなどを明らかにした。同時に、在日韓国・朝鮮人の肝硬変・慢性肝障害について、症例対照研究を行ない、日本人についての症例対照研究成果とも比較した結果、韓国・朝鮮人の肝硬変・慢性肝障害の大部分は、HBs抗原及び飲酒と関連していることを認めた。

以上本論文は、日韓両国を通じ、初めて在日韓国・朝鮮人の肝疾患を、疫学的に研究したものとして有意義であり、学位論文として、充分の価値をもつものと認める。